

連載**宇宙を観じる生活を！ (37)****～黄華堂ブログ～****黄華堂（代表：有本 淳一、ブログ編集長：山道 千賀子、小林 弘）****1. はじめに**

黄華堂は「子どもたちに本物の星空を！」をモットーに、関西を中心に観望会などの活動をしているボランティアグループです。観望会以外にも、1人でも多くの人に星を見てもらうきっかけになるように、黄華堂ブログ[1]として、星空案内や天文に関する情報をご紹介します。また、ブログの更新はTwitter[2]・Facebook[3]にて通知しています。

2. 黄華堂ブログの内容

それまではメールマガジンとして発行していたものを2014年4月から黄華堂ブログとして更新しています。今回はその中から「宇宙×○○ ～コーヒー～」、「宇宙×○○ ～ホスピス～」の2つの記事をご紹介します。

2.1 宇宙×○○ ～コーヒー～

今回の宇宙×○○は、「宇宙×コーヒー」です。読者のみなさんの中には日常的にコーヒーを飲まれる方や、疲れたときやホッとしたときにコーヒーを飲まれる方など、様々な方がいらっしゃるかと思います。コーヒーは地球上だけではなく、宇宙でも宇宙飛行士たちに飲まれていることをご紹介します。

2015年4月、イタリアのコーヒー会社Lavazzaと宇宙開発企業のArgotecが開発した「ISSpresso[4]」の試作品が国際宇宙ステーションに送り込まれました。コーヒーやお茶を微少重力下で作って飲めるようにする機械で、地球上での飲み方と変わらないコーヒータイムが実現しました。

これまで、国際宇宙ステーションで飲まれるコーヒーは、ゼリー飲料のようなパッケー

ジをしていました。その中にコーヒーの粉末が入っており、プラスチックの口から針でお湯を注入し、ストローで飲みます。「ISSpresso」も淹れたてのコーヒーをカップに注ぐのではなく、宇宙食を入れる生理食塩水バッグのような小さな袋に入れ、ストローでコーヒーを入れます。しかし、宇宙用に開発されたカップを使えば地球上と変わらずコーヒーを飲むことができます。そのカップは毛細管現象を利用して無重力状態でもカップの縁からコーヒーを飲めるようになっているのです[5]。油井宇宙飛行士は国際宇宙ステーションに滞在中、ドリンクパックのコーヒーより、カップで飲むコーヒーの方が美味しいとおっしゃっていたようです[6]。

こうして、宇宙でも宇宙飛行士たちがより美味しいコーヒーで一息つける時間が実現されたのです。地球を眺めながらコーヒーを飲む…なんて格別なのでしょうか。宇宙とコーヒーが好きなものとしては羨ましい限りです。
(5月16日更新：山道/大阪教育大学大学院)

2.2 宇宙×○○ ～ホスピス～

今回は、宇宙×ホスピスについてお話しします。いきなりですが、ここでクイズです。ホスピスとは、何でしょうか？

末期の患者さんが、積極治療を中止し、死に逝くまでの少しの時間を過ごすための場所と考えておられる方も多いのではないのでしょうか？この解答は正しいとは言えません。また、末期の患者さんが「生きる」ところ、とした人はほぼ正解といったところです。よりよい解答として、末期の患者さんがより良く生きるための施設であり、場所であり、そのた

めのあらゆるケア、システム、プロセスと言えます。ですが、ここまでの認識をお持ちの方は少ないと思います。さて、筆者は 2007 年より、ホスピス病棟で入院患者さん、ご家族さんを対象にした観望会を実施しています。実施のきっかけは、認知神経科学者のラマチャンドランの著書「脳の中の幽霊」[7]の次の一節に出会ったことでした。

「人間は自分が死ぬ運命にあることをはっきりと自覚し、死を恐れている。しかし宇宙の研究は、時間を超越した感覚や、自分はより大きなものの一部であるという気持ちを与えてくれる。自分が進化する宇宙という永遠に展開するドラマの一部であると知れば、みずからの命に限りがあるという事実のおそろしさが軽減される。」

これは、おそらくインド哲学の考え方だと思うのですが、自己の死と日々向き合わざるを得ない患者さんやご家族さんにとって、また違った面から死を捉え直してもらえるかもしれない考え方だと思います。そこで、黄華堂のメンバーでもある嶺重慎さんの主催されるユニバーサル天文教育研究会でメンバーを呼びかけたところ、地元の天文台職員や星空案内人の方が応じてくださり、実施の運びとなりました。参加者に星を見てもらうことや、曇天、雨天に悩まされることは、通常の観望会と何ら変わることはないのですが、ホスピス観望会では以下の点が異なっています。

1) 参加者が原則として健康体でない、Daily Living であること—観望者の姿勢の制限が非常に大きいことが最大の問題です。

2) 一般の観望会のように、「星を見たい」という強い動機をもって参加されるわけではないこと—ボランティア側が「押しかけている」ことの謙虚さを持つことが要求されます。

3) 多くの参加人数が望めないこと—ボランティアの一つの役割は、病棟に「世間の風」

を持ち込むことであるので、参加者が 0 人であっても粛々と遂行することが要求されます。

4) 死と直面するデリケートな場所であり、そして天体は何万年、何億年という自己の死を前提とした時間的スケール of 話題を含みます。このことが患者さんやご家族の死に対する不安を喚起しないとも限りません。そのような場合にも患者さんらとコミュニケーションが継続するように、天文ボランティア自身の死生観をある程度は醸成しておく必要があります。

上記のようなことに気を遣いながら毎回、試行錯誤で開催しています。

(1 月 12 日更新：尾崎)

文 献

- [1] 黄華堂ブログ: <http://oukado.jugem.jp>
- [2] 黄華堂Twitter: <https://twitter.com/oukado>
- [3] 黄華堂Facebook: <https://www.facebook.com/pages/黄華堂/277236582327100>
- [4] https://www.nasa.gov/mission_pages/station/research/experiments/1769.html
- [5] <http://coffee.ajca.or.jp/webmagazine/interview/76yamazaki>
- [6] http://iss.jaxa.jp/iss/jaxa_exp/yui/news/160316_yui_debriefing.html
- [7] Ramachandran, V. S. & Blakeslee, S. (2000), 'PHANTOMS IN THE BRAIN' (山下篤子訳『脳の中の幽霊』), 角川書店